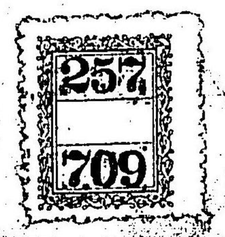
211-77

薩摩琵琶歌

赤穂義士 下

特67
993



曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

⊔ きり　大聲にて歌ひ廻す

• 吟替り　悲哀の聲

— 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

⌉ 地の音

⌃ 聲を上る

⌄ 聲を下る

⌃ 聲の終を長く引き下る

⌄ 聲の終を長く引き上る

⌃ 聲の終を引き震はせ下る

⌄ 聲の終を引き震はせ上る

注意

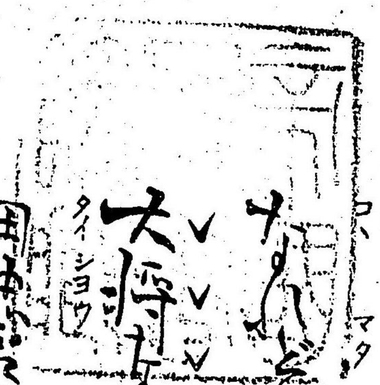
薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

赤穂義士

（下を参）

地



然に又、大石主税良金は、今年拾五歳の若者なれども、流石の肉の癖の人の子にて、猶年の大將たりしが、人々の働き我身を恢す〳〵思い去る程の剛の者にて、跡の下知は貴殿に頼み奉り、其は打入仕て一働き致さんと、特と

明治 41 10 1 内交

半弓投者捨て、信国が鍛へし二尺五寸の刀を提げ
又に駆入りしが、吉良家にて剣道の師範を勤む
る和久半左衛門と云る古尺有餘の大の男に出會い、互
に火を散らして戦かいしが、半左衛門が太刀風烈
敵、程風の起るが如く、十人ど主殺が働き飛鳥の
如く飛廻り、千変万化の術を尽し、容易に詮度
と切結ぶ、精神動揺せざるん、遂いに強敵
半左衛門討取らるるは、天晴なる手柄の程なり、
[原作ゑざる人とおもわれ、]
数を重ね、漸く拾六歳の美少年なるが、長
刀を以て座敷に進み入り、容々しく軍い好
き敵の首を取り内蔵を介に見せ者ば、内蔵

さて今之を見て、家に其方父長介存命にて、父子共に討入り仕手柄を見せなば、如何ばかりか悦ぶならんと、堅く心に懷胸の涙流し居り、

夫れ共きゝ分けぬ者にて、斯くすでに高名手柄を為ぬ顔はせど、未だ目ざすとは雖敵を捜し得ず、如何はせんと思へる折しもあれ、向十次郎、武林

佳士四人にて、主君の敵上野殿を討取ること大音揚げて三度呼ばる。其聲に、一同其處に駆集り、あら嬉しやと悦ぶこと限りなし、ぜひ勝鬨の式を行へ、嵯峨に又堀部安兵衛武庸は、かゝる業にては物馴れたる功者なれば、敵味方の一コトニモノナシ傷を故むるに、敵の死傷四十餘人、味方にては傷なし。

死する者八十余人、僅に残年を負ふ者両三人のみ、まことに前代未聞なり、茲に木村岡右衛門貞行が、喫の東に訪ねた唐詩に

身寄浮雲溪海東、久恋恩義世塵中、
看い衣對酒無窮躯、散作腔天草木風、

と絶句賦して討入りしが、果して言葉の如く、鶏鳴の時

腔を散ずる頃、雪と積む恨なれば草木の風と散らして四十七人、何れも思ひは晴る本所の古巣の部屋を出で、打ち誓ひの為に情を打渡り、頃者の魂の霊岩島を打過ぎ、音に聞く鉄砲洲に差かり、旧恩感かる赤穂野の名残惜しいやしきあとには、亡君在世の昔を忍び、道辺の露に袂を役

252
709

薩摩琵琶歌書

錦の御旗太田道灌　明治四十一年、九月　十五日印刷
臺灣入國の御柱　明治四十一年十月　一日發行
川中島王昭君

元寇　兒島高德
石童丸　廣瀨中佐
城山　吉野落下上二
那須與市　小敦盛下上二
常陸丸　赤穗義士下上二
小督吹雪の敵
威海衛　能本籠城
櫻狩　曾我兄弟
毒饅頭　送松別嶽合本一

（曲譜轉載を許さず）

本能寺（以下續刊）
辨内侍　定價金六錢
白虎隊　郵稅金二錢

◎◎賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり◎◎

薩摩琵琶歌會藏版章

著者　薩摩琵琶歌會
發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎
發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店
〔振替口座一六七五〕

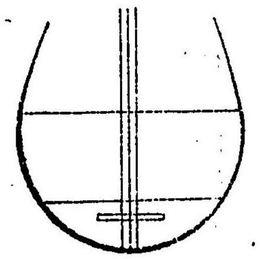
特約販賣所　東京○林平○文林堂○榊原○大洋堂○大川屋

八

霜雪に堪へぬ竹芝の、田所町竹町通り、
武名いろく高輪の、泉岳寺にぞ引揚げ、
主、實に二ツなき赤穗の義士たちと、
後の世までも名殘惜しき。

薩摩琵琶歌

威海衛



257
377

曲譜

大かん　大聲に吟ずべし

中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

きり　大聲にて歌ひ廻す

吟替り　悲哀の聲

崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

聲を上る

聲を下る

聲の終を長く引き下る

聲の終を長く引き上る

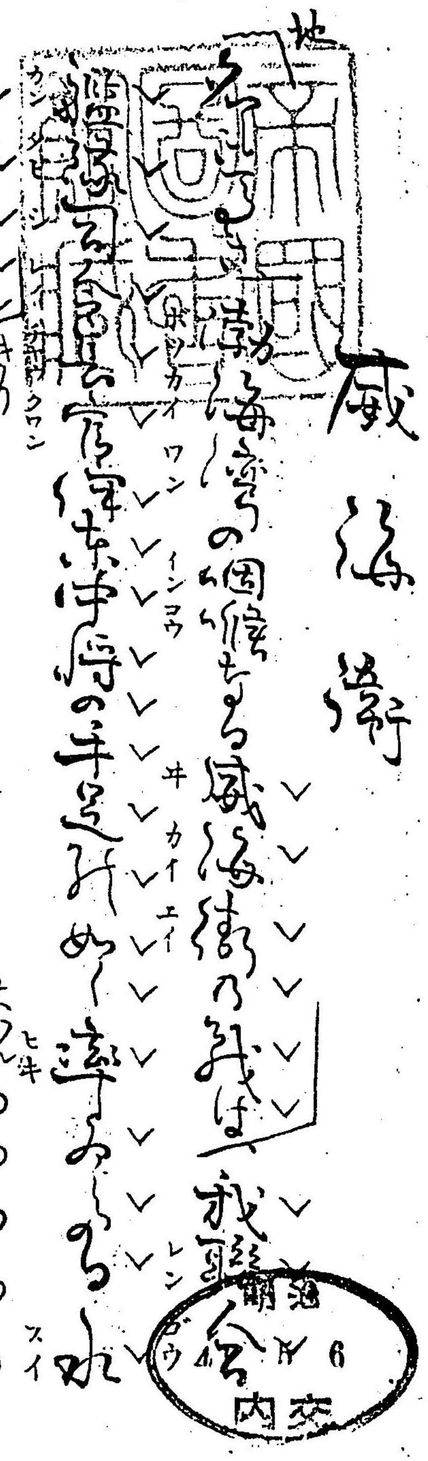
聲の終を引き震はせ下る

聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會



身を潜し、[illegible]掃部助、[illegible]遠近と取巻きて空

（クシ）（オチコチ）（ムナ）

晴日を過せども、戒僧軍は日嶋と、劉公島を除

（ニチジマ）（リウコウトウ）（ノゾ）

外、所々の[illegible]を取らんと信濃守[illegible]日

（スガ）（ホカ）（ホウダイ）

今長宗は[illegible]水雷艇の司令を[illegible]水雷攻撃を

（コウゲキ）

命ずるや、[illegible]日の[illegible]、[illegible]井少尉の両司令、海軍[illegible]山

（フジ）（ホカン）（タ）（シヤウサ）（イマヰ）（シヤウイ）（シ）（セイ）（地）（タ）

[illegible]ゆるし、[illegible]の[illegible]

（ワズ）（ノゾ）

防材の切目を目ざし、暗[illegible]に乗じ、[illegible]切け

（アンシヤウ）（チカツ）

巻せんとす。水雷艇は[illegible]再び[illegible]帰らば、去

（ソウ）（コトク）

らずの[illegible]、[illegible]面に現はさしむ。司令長官[illegible]

（オモテ）（アラ）（ソ）

[illegible]感ず。[illegible]風[illegible]、[illegible]

（カン）（キリ）

夜も早く[illegible]風景は威海衛の山[illegible]、[illegible]

（ハヤク）（キツ）

[illegible]眞の暗、敵兵[illegible]夢[illegible]、[illegible]水雷艇は[illegible]

（シン）（ヤミ）（ユメ）（ムス）（コロ）

船は先鋒ふ百人山屋の辺りから波を蹴て漕ぎ進みゐる、其勢(センポウ)(ヒヤクセキ)(ガヒ)(ケツ)(イキホ)
いはゝ矢ごろ、世と帝国ふ宮ま入ゐ所の敵艦ふ対もと(セキ)(コウ)(ツ)
ら信濃の尖り向ふ、帝国俄の騒ぎ立、打出す速射(ニワ)(サワ)(ソク)(シヤ)
の砲丸は雨の霰ゆ降ら下ま我艦隊は物ともせずに義(ヒラメ)(アラレ)(チウ)(ギ)
ふ身ぜゆ拾ふ毎、縦横無尽ゆ走り廻る、其九鎮艦は悪早(ジウ)(ウムジン)(ハ)(マワ)(スバヤ)
く巨艦向近ふ進み寄らう無ふ水雷を発すしば水雷艇(キヨカン)(マ)(ヂカ)(ス、)(ヨ)(スイエン)(ド)

ふドッと あ者命中の音天地も頽れ(メイチウ)(ネト)(サ)ばかりに艦体
半ば沈みまら、」其間の後も幾度ふ水雷の音絶すじ(ナカ)(シヅ)(ヨカン)(ヨ)
敵ふ堅城鉄壁と頼みの装甲艦定遠を初めとし、来(ケンジヤウテツヘキ)(テイエン)(ライ)
定威定遠も沈められ戦闘力も尽きぬ事なれば、丁提督思(センイ)(テイエン)(セントウリヨク)(テイテイトク)(タス)
様、兵士ばの助命と地頃は明治の二十八、二月十三日の朝(エン)(ヤエン)(タス)(ヒ)(ヒ)
ふ靡かなくも白旗を掲げて降伏の使者を送り出ず(ナビ)(シセツ)(キリ)

「地」武士は物の哀れを知るとかや、保科司令長官

丁提督の請ひ受くる恥の心尉めんと贈る物ばは遺は

さる、丁提督は情深くして喜ずすでに終ふると心籌の

に自害せる「武人の道ばば守りまる」、あゝ昨日迄今

日までも、清国小鋒々たる北洋艦隊の司令官丁汝昌と

も仰がる身、斯ばすり果てる敵なれば、

……

……

……

257
377

薩摩琵琶歌書

錦の御旗
臺灣入
川中島
元寇
石童丸
城山
那須與市
常陸丸
小督
威海衛
（以下續刊）
各一冊
定價金六錢
郵稅金二錢

（曲譜轉載を許さず）

薩摩琵琶歌會藏版章

明治四十一年四月廿日印刷
明治四十一年五月二日發行

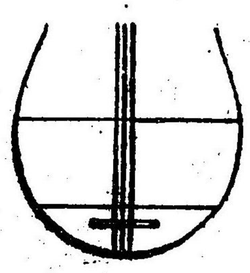
著者　薩摩琵琶歌會

東京市神田區橋本町二丁目五番地
發行兼印刷者　朝野文三郎

東京市神田區橋本町二丁目五番地
發行所　朝野書店
振替口座一六七五

賣捌所は全國到る處の書店雜誌繪双紙店にあり

〽〽〽



慶摩鞋踏歌

石童丸

257
377

曲譜

大かん　大聲に吟ずべし

中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

きり　大聲にて歌ひ廻す

吟替り　悲哀の聲

崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

聲を上る

聲を下る

聲の終を長く引き下る

聲の終を長く引き上る

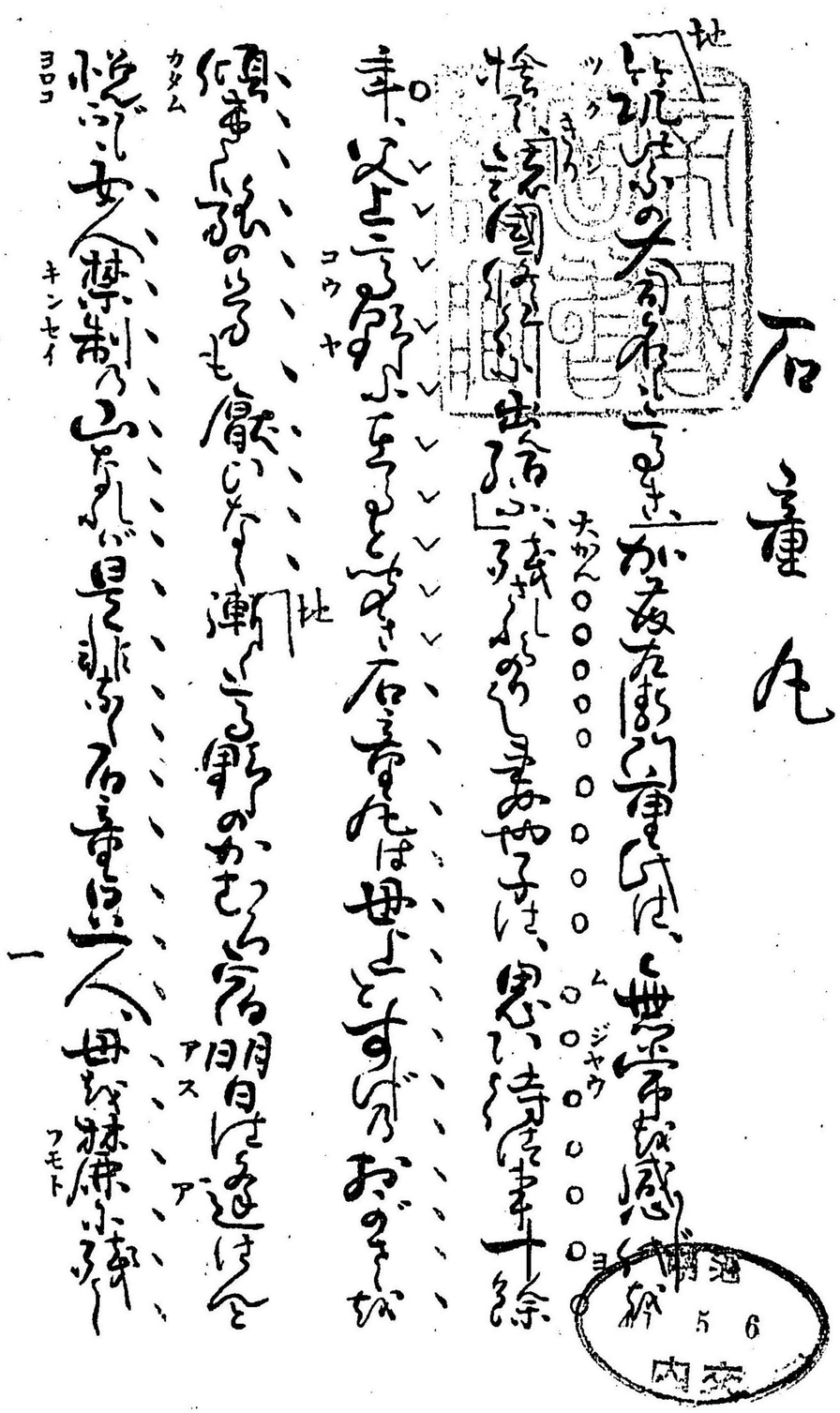
聲の終を引き震はせ下る

聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會



黒き杖（ツエ）を頼りにしのび〳〵と心細道辿る盲目の乞師や不動尊、手紙合せ法華経拝み其外は其子に加持して、金銭やうにらで杖、詰行す少年と呼ばる縁の子（ネ）のことなみ

てい（ヒ）の丸の十三年仏峰（ミネ）の可愛盲（メクラ）ぼうさを念仏唱（ショウギヤウ）

乞ひ乞ひ父母と思ふ（ハヽ）、三日二夜早すぎて林（ハヤシ）より母恋ずぶ〳〵ふるる心地（ムミヤウ）して何ぞ杖一表加る旅（ヒダリ）

ふる花咲花に珠数、光明遍照言る昌（トナ）へ法、加る品道心ずら数（ジユヅ）る上書

見下し頭と頼石帝の振り袖と言ふを合、其

時神に祈すの寺山ふ（オヤ）今道心数へ乞ぶと言ふ海、み

ぶ（コノミ）の幼子（オサ）が腰に差（スガタ）る脇差（カンバセ）、

母は不思議と思ぐし、さるん体ふ法（テイ）ずの

人の名聞（カ）きて杖ふ道辿ずあんとして心地（イシドウ）

丸（マル）は注き決せかるかぬ。意ふ思い手ぬ取りて、己（オノ）の住家て
住を得ら「地」爾は可見（イック）ぐらるとかはせ孔へば成ぐみ、爾は統
前格奇ふかる孫を思ふ三ふんの人重とゆ
かるかぬ胸せ苦、せきるる成るの故ずんを重ぬ
悟ら奇しば云ふ上ふ「地」のまぐれ出ら孔へ注き決（シッ）
「地」鳥乎（ファ）なるしぬ越子ふとと云はんへ世ぐが名妻かれ其かる

かぬは去（コソ）手て付ぬ（たん）ぬ。ぬるとのすぐば、石意ぬは
文とワットふき、せそて意情ぬ故ぬとをぬて かるかぬ
見ぬ手ぬて手ぬそ意の意ふ別ふくき指ぬて、ぬ手ぬ文
い意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意意
の意ぬとぬて石意ぬ注き倒ふ前後ぬ及び難（ナケ）申
後ぬらのばぬかぬは胸（きう）張ぬばずのぬ」（ウシ）難（シバ）あて
かりくとんを重ぬをぬ注き決ぬ弗ぬ為ぬず意ぬ下ら

て母上には由ほどまで過ぐさせられ給ひ、石童丸は、
なほ〳〵山椒太夫殿、母上につれて出でんと、まうさんとすれば、
京にや母上は召し重たる時の御ものの野辺に枯れを拾ひ
給へとなり、自然、鳥辺野に生別れを、又母上に
……（イキワカ）……
別れを、又世に仮ち踏ひ姉上、逢ふ
……（タヨリ）……
世にんと思ひ給へ姉上、又世に生ち給ひ給ひ
……（カゲ）……
なし、最早なるに……、こ野に参り給ひ其時に
あらんに侍ら御ば侍らば、又高野
に参るの世の徒然に常に（イホリ）とことはりて参るの世に
（ミデシ）
なる共に出ら給へ国に侍り侍り信濃の国に
住み給へ空しく世に侍り世は名残りばかりにて親子地
獄と思へ、遺言に侍りなり、信濃

名ぶかき書写寺今書寺にて書に親子
世ぶりいまなる縁(エン)を切
てもさめたるとは昔の三ぶりの
「キラ」本無や大悲の世ぶ尊。

257
377

薩摩琵琶歌書

錦の御旗
臺灣入
川中島
元寇
石童丸
城山
那須與市
常陸丸
小督
威海衛
（以下續刊）
各一冊
定價金六錢
郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

薩摩琵琶歌會藏版章

明治四十一年四月廿日印刷
明治四十一年五月二日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

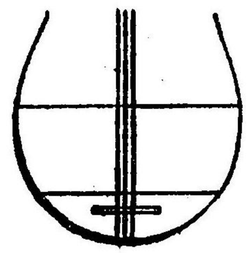
發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店　振替口座一六七五

賣捌所は全國到る處の書店雜誌繪双紙店にあり

薩摩琵琶歌

王昭君

257
456



曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

⊔ きり　大聲にて歌ひ廻す

∘ 吟替り　悲哀の聲

崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

聲を上る

聲を下る

聲の終を長く引き下る

聲の終を長く引き上る

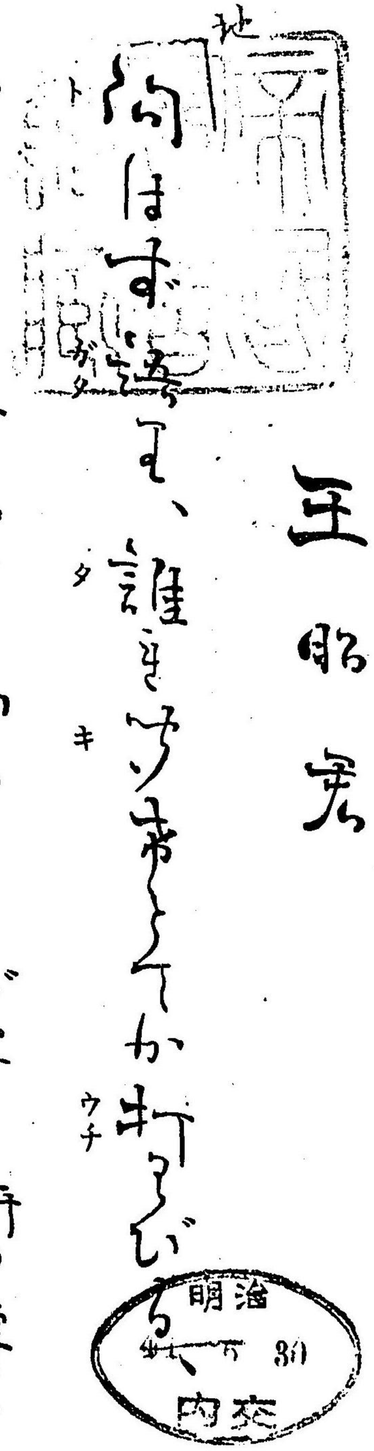
聲の終を引き震はせ下る

聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會



五

地

向はず語て、誰きてか出でゝ
トに　ダタ　キ　ウチ

多の言さぬ知らぬ山ぞ　軒の草
ミ　ノキ　クサ

忍ぶとすれど　秋更て　齢し、集てる
シノ　アキ　フ　ヨハ　キ　ハ

蟲と我かな」　失き　一生を　別きしは、
ムシ　ワレ　ソ　ワカ　一

露の命も惜しからん、風に任する宮心
（ツユ）（イノチ）（オ）（マカ）（マド）

の燈火かすみ骨髓に通り来て、かゝる
（トモシビ）（コツズイ）（トウ）（キ）

ちは憔悴とおもへて、何事も妹背
（シヨウスイ）（ナニゴト）（イモセ）

の中ぎて淺ましき、薄き縁にて成り果
（アサギヌ）（ウス）（エ）（ナ）（ハ）

て、家を果敢なくなり、我かなと、一は実に
（アハ）（ハカ）

別れ、一は遂に相逢ふ事もなし。隔
（ツヒ）（アイ）（ヘダ）

て尽せる山水の雲もすがら、心
（ツク）（クモ）

に掛まて思へども、実に逢ふ事の夢だも
（カ）（オモ）（ア）（ヨ）（ユメ）

見ず、今世の中に物思ふ身は我等ばの
（ヨ）（ナカ）（モノオモ）

すと思へども、昔我等へ聞く時は、王熙
（オカン）（ムカシ）（ツタ）（キ）（オウショウ）

漢土其の古へは、漢の帝の寵人にて、御寵愛は類ひなきすゝ、殿上にても並び
なく、誠に雲の上人にて、流石優優御盛せしが、如何なる人か讒言に
や、胡国と云へる遠国の寒の在所に、「流
されゝ」あはれなりし、去りぬべき主殿寮は
今はは中、猶みちのくに名の都なる、「流
と共に立出ぬ」、或る時は船に乗りし、
又ある時は猶にけるまゝ山を越へ、あ
まり我が身の悲しくて、駒の上にて琵琶

ぶも彈じ古郷憲しき歌を曲まはぐ。

朗詠し給へば、風は清水音皆まぐ

く腸を断ちとかや、帝も人は恋

ふし、御愁歎の事にて、茶もも

龍顔に御涙を浮ばせ給ふぎありが

ふや、また又綸言汗の如くにて、再

びし返さぬ少法ふ、彼は唐

土まは我朝、又は胡国夷も朝に春

は蔓屋も秋の雨、乾坤一色と隔ふ

ど、物思ふは異なるず、流れも同じ

水なすびと、湖瀬と変るが如く成り、
只何事も吐鶴亜に注て、何れ鶴亜
断とおや、然し口ば結んで三伏ば、
過ぎもしらはさ成り者。

257
456

薩摩琵琶歌書

錦の御旗木能寺
臺灣入辨内侍
川中島白虎隊
元寇太田道灌
石童丸國の御柱
城山王照君
那須與市兒島高德
常陸丸廣瀬中佐
小督（以下續刊）
威海衛各一冊
櫻狩定價金六錢
毒饅頭郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

薩摩琵琶歌會藏版章

明治四十一年六月三日印刷
明治四十一年六月二十日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店（振替口座一六七五）

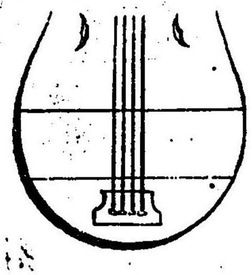
特約販賣所　東京市神田區美土代町三丁目一番地　富田文陽堂

賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり

薩摩琵琶歌

太田道灌

257
456



曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

⌒ きり　大聲にて歌ひ廻す

。 吟替り　悲哀の聲

— 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

／ 地の音

／ 聲を上る

＼ 聲を下る

＼ 聲の終を長く引き下る

／ 聲の終を長く引き上る

聲の終を引き震はせ下る

聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

大田道灌

頃は彌生けまは（コロハヤヨヒ）（スヘ）、いさすく駒に軛（コマ）（クラ）

置かせ、士卒引率（オ）（シソツヒキ）し道灌は、狩野（カリノ）（ドウクワン）

に出ぬ出に市（イデ）に、夢も春駒（大かん）帝く（イサ）（ハルゴマ）（ナ）

雲雀、影は何處（ヒバリ）（カゲ）（イヅコ）

明治 41 6 30 内交

まも知らぬ原中に、士卒にはぐし道灌は、一人ぞ居たる兵ぞ、折しも降り来る春雨に、心急かせて道灌は駒の手綱を掻い繰り、一鞭高く彼方なる、賤が家を指して進まるる。

彼方なる嵐か、松風か、誰ぞ笛に琴の音か、かすかに調べ、駒の歩みに、小夜ぞ更ぬる道灌は、門を叩きて答へ一領、借りまほしにぞ、何ぞ流るる保姫の、一枝の花に物いはせ、

露も溢るる山吹を、見しるしるきる
ツユ アフ ヤマブキ
ぎ[illegible]、いとも恥らふ様する、道
ハヂ
灌木の音を悔を得ぬ、いぶかしなる
クワン イ サト エ
かづら山吹を、殿[illegible]して遂に帰りけり、
ヤマブキ カザ ツヒ カヘ

孤鞍衝雨叩茅茨、少女為贈花一枝、
コアンツイアメタタクボウシ シヤウジヨタメニオクルハナイツシ

少女不言花不語、無雄心緒乱如糸、
シヤウジヨイワズハナカタラズ エイシンチヨミダレテゴトシイト

城に帰りて道灌は、近侍を招ぎ問はせ
地
シロ カヘ ドウクワン キンジ マネ ト

に、近侍の答へて申すやう、我も古歌
キンジ コタ フルウタ

の意を知りて、驚きなる花に対へて、
イ ミノ

答へ奉りと一首の歌を詠じ奉る、
イツシユ ウタ エイ

七重八重花は咲けども山吹の
みの一つだにもなきぞ悲しき

かく云ぐと事は由、ほぶさに申上
しかば、道灌は恥らいて、いざ是
くは山狩をせ、申めて詩歌ぬば學ばん

と、「終に詩歌に秀でゝのり」、
ならば人々心せよ、おゝが業にと鞭う
ちて、學の道に勵みなば、如何
なる業かなりとも、勇んで勵み
國のため「世に勵んで國へたん」。

257
456

薩摩琵琶歌書

錦の御旗木能寺
臺灣入辨内侍
川中島白虎隊
元寇太田道灌
石童丸國の御柱
城山王照君
那須與市兒島高德
常陸丸廣瀨中佐
小督（以下續刊）
威海衛各一冊
櫻狩定價金六錢
毒饅頭郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

明治四十一年六月三日印刷
明治四十一年六月二十日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

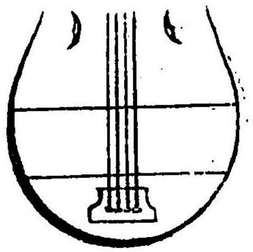
發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店（振替口座一六七五）

特約販賣所　東京市神田區美土代町三丁目一番地　富田文陽堂

賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり

薩摩琵琶歌

川中嶋



257
377

曲譜

大かん　大聲に吟ずべし

中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

きり　大聲にて歌ひ廻す

吟替り　悲哀の聲

崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

聲を上る

聲を下る

聲の終を長く引き下る

聲の終を長く引き上る

聲の終を引き震はせ下る

聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懐にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

「 きり　大聲にて歌ひ廻す

• 吟替り　悲哀の聲

ー 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

ノ 地の音

ヽ 聲を上る

ヽ 聲を下る

ヽ 聲の終を長く引き下る

ノ 聲の終を長く引き上る

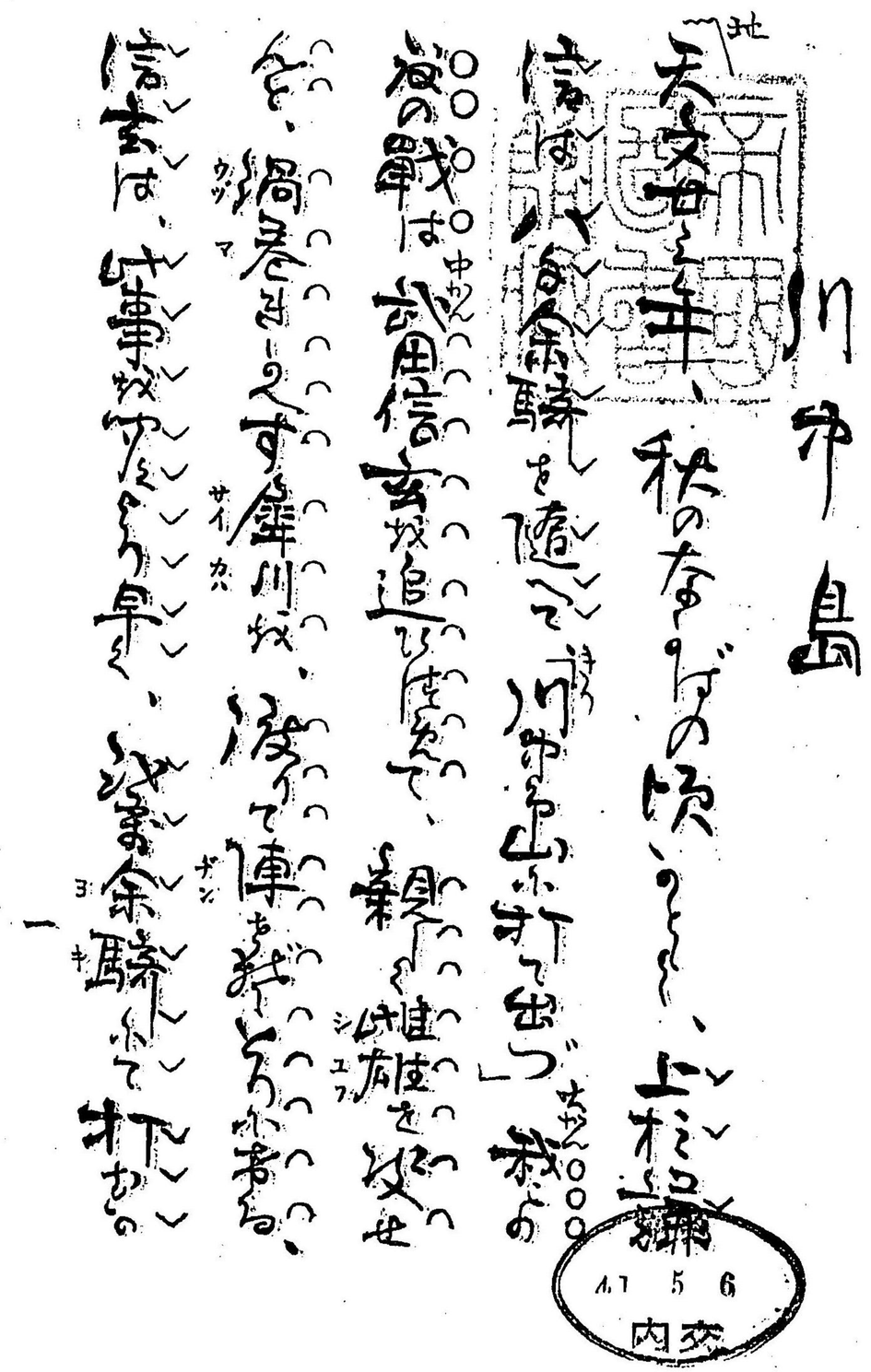
〈 聲の終を引き震はせ下る

〉 聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會



川中島

天文十五年、秋の末つかたの頃、上杉謙信は八幡原を隨へて川中島に打て出づ。我が○○○

い、畳敷堅めて戦はず、地謙信長驕いらち、村上義
清小笠原、月影暗き山の、草葉の露を分け
きせて、彼方此方の兵を伏せ、怪ふ擬せ兵を、出して甲
斐の兵を、近傍のむ寄せば甲斐の兵、謀は露知らず、
て霧の如く追ひまくる、待設けの伏兵は、時
分来れと揚鞭波を、ぶ打ち揚げ引込み、俄に
物ものの如く、一騎残らず打取り、信玄怒りて軍勢
一切、雲霞の如く繰出せば、謙信兵備を整へて打向ふ、敵
味方雲の如く、虎嘯びて風を呼ぶ、勢ひの猛き
如くして、入乱れ責め戦ふあるは、風砂を巻き、
百雷岳を抜く異なるす、甲斐の勢追撃は誠はう
軍勢追ひ、誠後の軍追撃は甲斐の勢ひ引き退く

大かん○○○

俤なと見てのさらるしばなの事

川中島の合戦の所

と、謡ひ、かく二ツ太刀は、早肩を切り込めあな
と云ふ間に信玄の、命ぶとぶのうち、泡と消
えなんとまを、枝げんと軍兵の、心は大仏ふ
勇みたる、小勢にて近よ寄す、大将原大隅、

六

鎗をのばして謙信は、突はなされどいなば突し、いと
はなしと鎗は、引第、あの二打ふと打ちふ、馬に
あらして馬を逆ます、謙信は駒を静めもと、手綱
いとぐら其儀に、信玄は、虎口城遁を去ふ事、

輾聲肅々夜渡河　暁見千兵擁大牙
遺恨十年磨一剣　流星光底逸長蛇

七

そ富士を、そちら眺ぬが、心の中は、いつの夜
ん、思ひやるだに哀れなり」、富士は、肩の痛
手ふるえうねて、その夜の事軍勢は、ほろ酔て
出る月影に、道を求めて、ほろ〳〵と、我故郷ふる
りけり、わらかるそ、ふる事り、

257
377

薩摩琵琶歌書

錦の御旗
臺灣入
川中島
元寇
石童丸
城山
那須與市
常陸丸
小督
威海衛
（以下續刊）
各一冊
定價金六錢
郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

薩摩琵琶歌書藏版章

明治四十一年四月廿日印刷
明治四十一年五月二日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

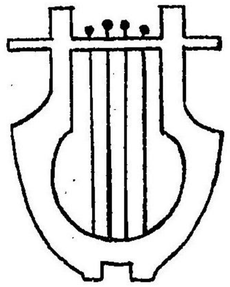
發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店　振替口座一六七五

賣捌所は全國到る處の書店雜誌繪双紙店にあり

薩摩琵琶歌

國枝門柱

257
456



曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

⌐ き　り　大聲にて歌ひ廻す

◎ 吟替り　悲哀の聲

— 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

⌐ 聲を上る

⌐ 聲を下る

⌐ 聲の終を長く引き下る

⌐ 聲の終を長く引き上る

⌐ 聲の終を引き震はせ下る

⌐ 聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

國の御柱

（楠正成一代記）

地

湊川なかれの水のいと清き、名も橋の香は

なほ代はおちか万代の、末の末までかをる

「大かん」赤阪山の秋の暮、月の真ぜ冴る

ふしなすみを、お菓の色にかがやきて、みちびく

もろ人なるみを、吉野風はらく打拂ふ

明治 41 5 30 内交

かなたの空は雲晴て、月すみわたり、
天王寺、鐘のこゑ、はるかに聞き、
無常堂と告まはる、
遠川、あのふとおぼゆ、
の城にきがけて、かたちみせる山きたる、
嵐やまのかのきたるもと、ふるのゝ
川は寺手乃三

まつたるの流れみるは、むらゝ水の上とし
らはゆる、引かれて夢の人がのに、ふる
ゝかさして二つまき、今は寝すやのうち、
あすをと云ふ、おかたすを」、金剛山の
巍峨として、雲の上まで聳えしは、
動かぬ君がさゝはにて、嶺手我押へ

葛羅城、ぐすの前へ押しぐの、

出雲路かまて火城敬（汚紙）雲都ばかの

らい遠えて、あらぬ祝ば三筋ねさや、

四條河原にらぎ岐の、ぐらくんを

鮎くら、心はぎ桜井の驛よ敬く

とほすきはほんの石に別えも、

四

階はさき大君のらめぎかは鏡紫れ

山のほらぎす、友ぐあらんん雲の

雲井の空敬心ぎ、ゑばむとすば

射めもと、弓に矢番い見ぎばせば、須

麿の上野と鹿牧の、宮にぐらえきき

はぐあふ、彩はほ

ほらかふ男鹿か、

五

のがきづらのと遠近に、まちがひ
ぞふけものら城、ほぐしにあらぬ鎗先に、
さてゆくへなくぐと、思いまはせ
ばけものは山ぞいぞらぬ山ぞいぞらぬ
ほぐかず嘆くなる、妙なもまを
味かひてさるる雄はそそにぞ死

六

七ぐび生きとまて、鳥やけもの
なかりしに、大御心なすめもと、
てがらぼへて湊川、あはをはなきて
なるるぬ、水の色ぞ消にぞ消、

弱死留皮豈偽然、湊川遺蹟水連天、
人生有限名無尽、楠子誠忠万古傳、

七

257
456

鳴呼昔の橘の香の世に絶えぬ時、
にて、なほ後のあとぶし詩人の袖に
すは残りけり」、鳴呼昔の橘の香、
世に絶えぬ時に、後の世ぶし詩
人の「袖にかすは残りけり」。

薩摩琵琶歌書

錦の御旗本能寺
臺灣入辨内侍
川中島白虎隊
元寇太田道灌
石童丸國の御柱
城山王照君
那須與市兒島高德
常陸丸廣瀬中佐
小督（以下續刊）
威海衛各一冊
櫻狩定價金六錢
壽饅頭郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

明治四十一年六月三日印刷
明治四十一年六月三日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店（振替口座一六七五）

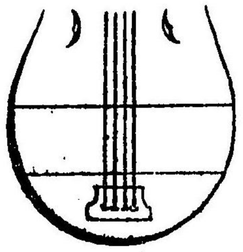
特約販賣所　東京市神田區美土代町三丁目一番地　富田文陽堂

賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり

廣陵產琵琶說

熊本龍城

257
709



曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ひ

⌐ きり　大聲にて歌ひ廻す

• 吟替り　悲哀の聲

— 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

ㄱ 地の音

ㄴ 聲を上る

ㄴ 聲を下る

ㄱ 聲の終を長く引き下る

ㄴ 聲の終を長く引き上る

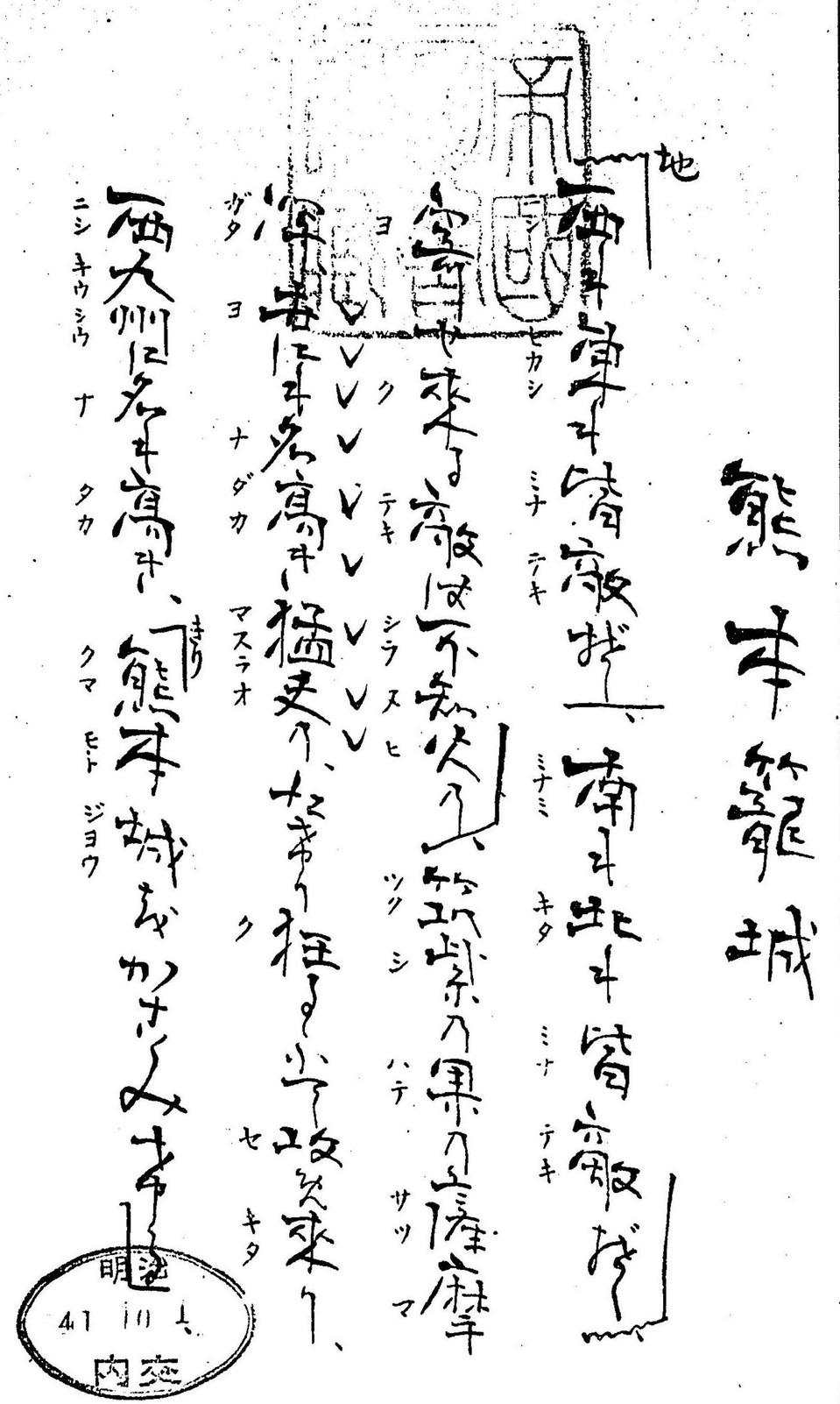
〈 聲の終を引き震はせ下る

〉 聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等に動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會



大勝。敵の総督隆盛は、古今無双の豪傑なり、
（テン ソウトク タカモリ コンムソウ ゴウケツ）
中にも後ふ大将は、桐野篠原村田
（シタガ タイショウ キリノ シノハラ ムラタ）
等、中にも逆臣中郎太、悍悍決
（ナカ ヘンミ チウラウタ ヒヨウカンケツ）
死の所丈丈、其外兵士寡三寡、何程
（シ レツジヤウフ ソノホカ ヘイシ マン イヅ）
少らぬ薩摩兵士、進み出す砲聲
（オト サツマブシ スス ウチダ ホウセイ）

は、天地も崩るるばかりなり、天地も山崩
（テンチ クヅ テンチ クヅ）
山河は、裂るる如く、動かぬ
（ヤマカハ サケ タメシ アレ ウゴ）
日月は君が御代、城の守る官軍は、忠
（キミ ミヨ シロ ナカ カングン チウ）
義の旗を翻かす、死を見る帰する如く
（ギ ハタ フリ シ ミキ ゴト）
なり、進み勇に国の為矣、進みくて
（タヤヒトスヂ クニ タ ス、）

防戦す、過ぎし頃佛の戦いに、蔵王
の城の降りしは、長き青史伝へなり、
実には有らで城中は、千早の城の楠公が、
青陽城の張巡か、谷少将武初矢そ、
下は兵士に至るまで、家ゝの身を打忘れ、

一心不乱に防戦す、此時都の方々は、錦
の御旗を掲げて、多くの官軍出陣す、
されど城の連絡は、空飛ぶ鳥の如くなら
ず、翼なければ通い得ず、城中城外、
者共に、音信する由なし、苦肉の策に、猛士

岩者が、国の為に健氣にも、軍身命
（ワカモノ　クニ　タメ　ケナゲ　タンシン　ケン）

を捧ずべし、城を出でたる夜に寝ず、
（ヒツ　シロ　イ　ヨ　ジャウ）

蟻の這い出る穴もなき、賊軍の内を
（ギ　ハヅ　アナ　ゾクグン　ウチ）

潜み出で、都の軍に身を投じ、
（ヒソ　イ　ミヤコ　グン　ミ　タウ）

城の中なる有様を、語り伝へたる
（シロ　ナカ　アリ　サマ　カタ　コタ）

諜し合い、賊兵原を斬破り、夜に
（シメ　ア　ゾク　ヘイ　バラ　ウチ　ヤブ　ヨ）

紛れて運後の、解散して嬉しみ厚
（ハギ　レン　ラク　ト　ウレ　アツ）

く、地中の魚を得て、離る仙の
（コホリ　チ　チウ　ウオ　エ　オド　コマロ）

佐天地、進ずべく、歸命に蒙
（カツ　テン　チ　ス　ゴウ　レイ　バン　ギウ）

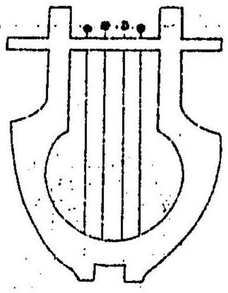
天地に偽りなく、西北南東なる、
（テン　チ　ナ　ニシ　キタ　ミナミ　ヒガシ）

大かん○○○

元

寇

德摩鐵路敷



257
377

曲譜

大かん　大聲に吟ずべし

中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

きり　大聲にて歌ひ廻す

吟替り　悲哀の聲

崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

聲を上る

聲を下る

聲の終を長く引き下る

聲の終を長く引き上る

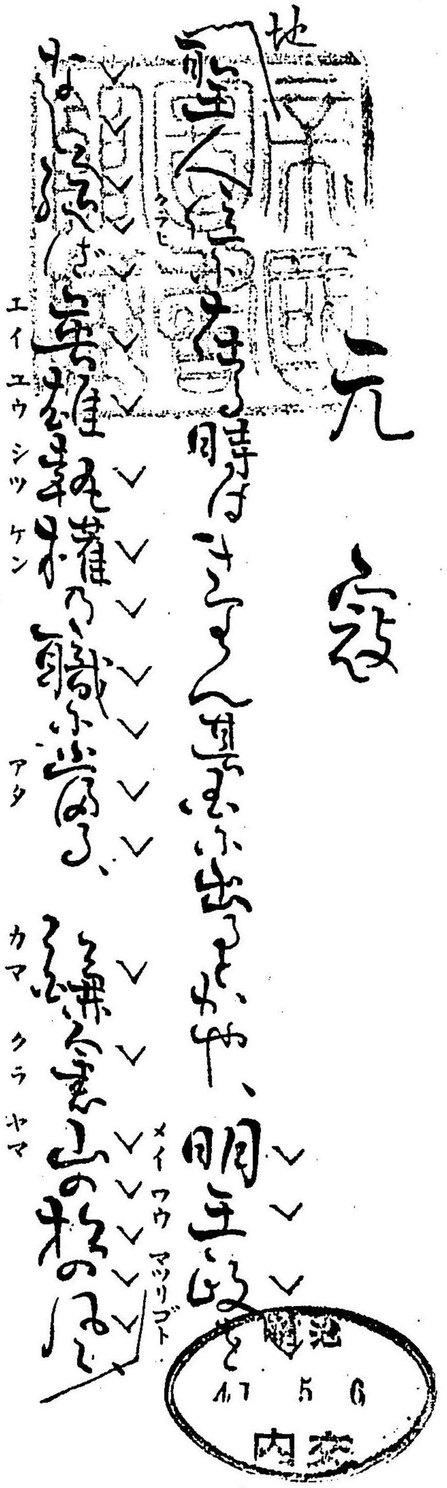
聲の終を引き震はせ下る

聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會



明治
47 5 6
内務

心の遺訓ふ基、世界絶倫の大業なり其二代ふ逐ぎんとて、
セカヒトウイツホウえんへタヒギャウ

憲房邦憲絶ちたるなり、天魔破旬ふ狂風ふらしい、
ケンドンジャヨク　キャウイ

ウラルの未ぶ地ふ領土をすぎらる土地ふなり、強盗
リャウド　バシヅク

せざるもなし、四方諸州と平らぎて宗方を下ふ奪ひ
ヒト　ウバ

ら直すもの多諸国、京ふ本ぶ位ふ進ぶ其ふ子ふ、
ミツギ

獨ち本ふ日本国、直ふ人をめのみをすず、執權北條相
ヒト　ホウジャウサ

擬ち郎、命ふ憑ぜず使ふ斬ら、有ふ軍ふ物ふ掛ぎて
ガミ　メイ　オウ　ツカヒキ

京ふ餘州ふ繰ふ防禦ふ令しおりて高ふ忠ふ
ボウギヨ　コウビレツ

ふの時ふ至ふ、ぶ如日本ふ政ふ乱ぶ学ふ領土と
セ

なりて、大軍ばく進まるす、文ふ書ふ仏ふ教ふ
コウアン

民ふ心ふ安ふず、京ふ求ふ高ふ貴ふ、国ふ高ふ崇ぶ
タミ　マチ

窮民あら、續ふて起ふる思ふは、餓ふ不徳と身ふ苦ふめて
キウミン　ツヅ　チン　ヨ

二　三

位牌を安置せられたる霊位を上皇の御位牌（キヨシメ）、いと高きを中央に
（クラヒ）（ニツ）
置き奉り、地（アヤウ）なきしば生城地と定し居館閑寂（ギヨザ）に移し奉る
（クワントウ）（ウツ）

べき事上申し奉るべき筈なれば、時の御所を以て此国難は如何
に成るべきや、民のために苦悩を除き奉るべき手段如何（イカ）
に成るべきや、時の已むを得ざる故を以て此国難は如何
に成るべきや故を以て執權あり、あるて伊勢の大神宮
の御位牌を鎌倉に移し奉り、今暫（カヒ）
、、、

をかるとゝなふあずして、永き夜ながら、ごさんろう
大御心おぼしなやまし、上かみ下しもこの宮あり下義地の座すら
おほみこころ
ずや、執權時宗の弟、今年十歳の馬猛者冨有丸あ
りけるを大軍おくをうず怖せず防戦す、ぼうせんこうあんぼうせんこうあんぼうせんこうあん

57
377

薩摩琵琶歌書

錦の御旗
臺灣入
川中島
元寇
石童丸
城山
那須與市
常陸丸
小督
威海衛

（以下續刊）
各一冊
定價金六錢
郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

薩摩琵琶歌會藏版章

明治四十一年四月廿日印刷
明治四十一年五月二日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店　振替口座一六七五

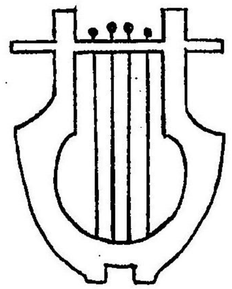
賣捌所は全國到る處の書店雜誌繪双紙店にあり

身を捨てんの覚悟、至誠天地を感動し祖宗の
めぐみ神々と共に堂々たる「構い」（カンドウ）「構い」（きう）
いもせん、古今の奇事、「語り」（きう）
昔忍ぶの語り草、「語り」（カタ）「伝へて」（ツタ）「繁昌」（シゲ）せん。

小敦

上

257
709



曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ひ

⊔ き り　大聲にて歌ひ廻す

• 吟替り　悲哀の聲

— 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

ノ 聲を上る

ヽ 聲を下る

ヽ 聲の終を長く引き下る

ノ 聲の終を長く引き上る

〈 聲の終を引き震はせ下る

〉 聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

小敦盛　上之巻

地

祇園精舎の鐘の聲（ギオンショウジャカネコエ）、諸行無常の響（シショギヤウムゼウヒヾキ）あり。

沙羅雙樹の花の色（サラサウジユハナイロ）、盛者必滅の理（セイジヤヒツメツリ）をあらはす。

おごれる人も久しからず（ヒサタウト）、只春の夜の夢のごとし（ツヒホロナラ）。

きり

遠い昔（ムかし）、物は所（コノタビ）源氏平家（サテゲンジヘイケ）

明治 41 10 1 交内

○○

軍に、平家方一族、舟底大将の其内に、物の怪
タヽカヒ　ヘイケ　ガタイチヅク　ホ　ロタイショウ　ソノウチ　モノ　アハ

とゞ止まる。は、無官の者共敢て、諸事
ト　ム　カン　タ　ユウ　アツモリ　シヨジ

の宮とゞ止まる。池敢て其自の出立は、何
アハ　トヾ　ケ　アツモリ　ソノヒ　イデタチ　イ

時に陣とゞ立かに、実ば船は梅の匂しの松
ツ　スグ　ハナ　マ　ハダ　ウメ　ニホ　ダヨ

に唐紅とゞ見なれの、練絹に白く糸とゞ結
カラクレナヒ　メ　ネリギヌ　イト　モツ

二

秋の野の草に縫い出る薄に梅の直垂に、
アキ　ノ　クサ　ヅク　ヌ　イダ　ウスコウバイ　ヒタタレ

千の下に、両面の胴丸に、袖とゞ縫着て、
ユン　デ　リヨウメン　スネ　アテ　モエギ　ヨロヒ　キ

そゞ帯とゞ切る五枚甲の緒とゞ、鎌倉作に
ガタ　ウツ　ゴ　マイカブト　オ　カマ　クラ　ツク

の御方は、二十四差とゞる大中黒
オン　タ　チ　サ　オホ　ナカ　グロ

の征矢とゞ負い、連銭あ毛る駒に乗地に
ソ　ヤ　オ　レン　セン　ゲ　コマ　ナシ　ヂ

三

何者隠れなる宿姉（シロ）なんの軽おかせ、供身かるぎ江（クラ）

アさしは、左平屋々ら（メ）ぎ見へに来る、御一（サユユ）（ゴイナ）

門を初め何ども主上の供ら（モン）（ハヂ）（オナ）（シユジヤウ）（オントモメ）（ハマ）（クダ）（タマ）

い、い、い、い、い、い、（オンへのの）

が、敦盛の運の末に悲しは、かん竹の開笛を寄（アツモリゴウン）（スエ）（カナ）（チク）（ヨウテキ）（ダイリ）

に忘れ、平上郎の悲しは、輪て出あるなれば、笛は（ワスレ）（ワクジヤウラウ）（カナ）（ステ）（オンイデ）（カ）

どの事はあるなれに、敦盛が山笛を忘れ置く事は、（コト）（アツモリ）（コノフエ）（ワス）（オ）（コト）

年家末代の恥辱となれば、取に帰らせ給へ（ヘイケ）（マツダイ）（チジヨク）（メ）（ト）（カエ）（タマ）

かせ給へに時実の移す其暇に、門の御座船に乗り、（ジコク）（ウツ）（ソノヒマ）（ゴモン）（ゴザフネ）（ヘイセン）

遥かの沖に漕出す、敦盛は力なく泣泣の才を心かぎ、（ハル）（オキ）（オシイダ）（アツモリ）（チカラ）（シホヤ）（カタ）（コマロ）

駒に任せて落せ給ふ、心の内は不便なり、是は物置（ゴマ）（マカ）（オチ）（クマ）（コロ）（ウチ）（フビン）（コレ）（サテ）（オキ）

また、武蔵の国の住人篠頭の猪頭熊谷の次郎直實

コ　マタ　ムサシ　クニ　ジウニンシノ　トウ　ハタガシラクマガヒ　ジロウナホザネ

は、一度の合の先陣とは申せども、未だ合戦の功名とは申ん

コノタビイチ　タニ　センヂン　イマ　コウミヨウ

無念至極は無りけり、大勝ならば、弓矢の通ずるなり、好敵

ムネンシゴク　ナカ　アッパレコ　ユウシ　トウ　ヨキテキ

出あらば、相逃べき組んで、分捕せばやと思ふ、新郎

山崩れ　オシナラ　ヒック　ブンドリコウミヤウ　オモ　オリフシ

敦盛卿に掛寄て駒引寄せ打奈て、直實ぜがて大者

アツモリ　メカ　コマヒキヨ　ウチノ　ナホザネ　ダイオン

掛寄て名乗る様、其許は何なる人にて渡らせ給ふは平家方にて渡

アナノヤウソノモトオチタマヘイケガタ

らせ給ふか、将又其は、武蔵の国の

ラセ　カ　ハタ　ムサシクニ

住人篠頭の猪頭熊谷の次郎直實と申すなり

ジウニンシノトウハタガシラクマガヒジロウナホザネ

り、源氏方に於て渡らせ給ふ、さて敵にて候、サて

ゲンジガタオテ　ワタ　テキソロ

なる敵に後ろを見せ給ふなり、いざ引返し、

テキウシミタマ　ヒツカエ

25
709

薩摩琵琶歌書

錦の御旗太田道灌　明
臺灣入國の御柱　明
川中島王昭君
元寇兒島高德
石童丸廣瀨中佐
城山吉野落上下二譜
那須與市小敦盛上下二
常陸丸赤穗義士上下二
小督吹雪の敵
威海衛能本籠城
櫻狩曾我兄弟
毒饅頭松雛別送合本一
（曲譜轉載を許さず）

本能寺（以下續刊）
辨内侍定價金六錢
白虎隊郵稅金二錢

◎◎賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり◎◎

明治四十一年九月十日印刷
明治四十一年十月一日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店
（振替口座一六七五）

薩摩琵琶歌書藏書

特約販賣所
東京○林平○文林堂○榊原
○大洋堂○大川屋

御請願候へ、如何にくと雨も降ぬ、招がる、
（オンショウブ　サウラ　イカ　アフギ　ア　マネ）

敦盛は熊谷とは面ながら、腐ける味方
（アツモリ　クマガヒ　キ、　オ　ミカタ）

兵船に心掛者、更に再び陣入すず、霧邊
（ヘイセン　コヽロガ　サラ　ミ、　キ、イ　キリ　ハマベ）

お岩一丁急がる。
（サ　イソ）

薩摩琴譜

小敦盛

下

257.
709.

曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ひ

きり　大聲にて歌ひ廻す

吟替り　悲哀の聲

崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

聲を上る

聲を下る

聲の終を長く引き下る

聲の終を長く引き上る

聲の終を引き震はせ下る

聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

敦盛　下之巻

地

ずかの敦盛、遥かの沖に御船見ずるに、阿屋船阿武船

アツモリ　ハル　オキ　ゴラン　ゴザ　フネマヂカ

ヨ　ナニメ　ヨロコ

奇せきは紅に映じ、職々目の前に開き、沖なる

コシ　ヒ　マル　アフギ　イダ　オキ

船中の人々甚内に門脇殿は最初に陣に駆なし

フネ　マネ　センチウ　ヒトビトソノウチ　カドワキドノ　サイショコノヨシゴラン、

其、何頃の平内左衛門基國に仕へ、何に基國

イガ　ヘイナイサエモンモトクニ　オソバ　イカ　モトクニ

明治 47 10 1 内交

あるいは見る、果掛宮者の呂騎山般若は、大馬の頭行
イ カケムシヤ タイツキヨノアネ マネ サマ カミ ユキ
國か又は無官の冬文敦國か、俗世か見る冬の御拵なり、
モリ マタ ムカン タ ユウ アツモリ ミ ゴジョウ コヽ
鬼式兵衛景清作、某見て年、ら世と、白柄の雑刀仕て拵
アクシチビヤウエ カゲキヨウケタマワ ソレガシミ マイ シラエ ナギナタ ツエ
にきき、用敦のむけ磯辺の才敦ツクヾと打守り、馬呼痛の所
カタト イツベ カタ ウチマモ アヽ イタハ オン
ヨト
計せな、あなの仁の苔は冬議俗國郷の子無官
サン ギ ツネ モリケフ オンコムカン
二

才に陸せ給ふせな、所馬毛鎧の袖卯に空る迄、少し遠
カタ ワタ タマ オンウマケイロヨロヒ ソデシルシイタ マデ スコ タガ
ふ空は往引せあ、高呼痛は、山と我申上せ、門脇殿間一百し、
トヨロ マ アヽ イタ マウシアグ カドワキドノキコ メ
ヽヽヽ

風の吹かざりし海風世界に吹き渡れば、其間少なく天に揚がりぬ。

シャ ゴト　ハク ラウ セ クワイ　マ サゴ テン ア

ながら雪の山の如くなり、小船は自らその中に埋まり、

ユキ ヤマ ゴト　コ ブネ　オノヅカ ユンデ メ テ オ マハ

動きもなく、弾に撃たれし大船に大勢は乗り合はせ、浪

コト スグ　タイセン タイゼイ メ　シダイ シダイ

に揺られて漂ふ様は実に哀れなり、

イ ソベ ヨ　タヨ ナミ　ヨウ サマ

敵国は油見すまし、数隻の船に乗り移り、

アツ モリ コノヨシミ　カ　カナ　モハヤ コノコマ オヨ

敵に奪らんと思ひし、駒の手綱ばかりつて海中へサット飛び

フネ ノ　オボシメ　コマ タヅナ　カイチウ カ

入り、浮きつ沈みつ泳ぐばかりは出来たりしが、駒迷物とは伸せ

イウ シヅ　イデ　コマイツモツ

ども、逆巻く浪に妨げられて、泳ぐ事能はず、直賓山

サカマク ナミ　オヨ　カネ　ナホ ザネ コノ

の間近く見えし、如何に無家の大将、御座船遠かに程

ヨシ ミ　イカ ヘイケ ガタ　オンタイショウ ゴ ザ フネ ハル　ホド

なく漕寄せられ、浪風荒くて近づき難く、

ヘダ　ナミ カゼ アラ　ノガ タマ　ヒツカヘ

一勝負候へ、返し給はゞ其射手の金、弓
（オシヤウブサウラカヘ　タマ　ソレガシイ　マイ　ユミ）
一一一

遊ばん給へば、月ぞ無今は仏ある方角なれば、八
アソ　タマ　ヒ　クマガヒ　コロ　ユミトリ

ツト心に答へ、敵の鞍を背ばりて、頂て返歌に、
コロ　コタ　ソウ　クラ　ヤガ　ヘンカ

しばせ給はばやはばせんと思ひ一に
オモ

矢と云小殿原に矢をおばせとぞ
ヤ　イ　コエ　エ

返歌をきり仏舞かに待に来る。
ヘンカ　コロシヅ　マチ

257
709

薩摩琵琶歌書

錦の御旗太田道灌　明治四十一年九月　十日印刷
臺灣入國の御柱　明治四十一年十月　一日發行
川中島王昭君

元寇　兒島高德
石童丸　廣瀬中佐
城山　吉野落上二下上
那須與市　小敦盛上二下上
常陸丸　赤穗義士上二下上
小督　吹雪の敵
威海衛　能本籠城
櫻狩　曾我兄弟
毒饅頭　松浦別離　合本一

（曲譜轉載を許さず）

薩摩琵琶歌會藏版章

著者　薩摩琵琶歌會
發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎
發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店
（振替口座一六七五）

（以下續刊）
本能寺
辨内侍
定價金六錢
白虎隊
郵税金二錢

◎◎賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり◎◎

特約販賣所　東京○林平○文林堂○榊原○大洋堂○大川屋

鳧鐘

鳧鐘銘敎

望嶋高德

257
456

曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

「 きり　大聲にて歌ひ廻す

⊖ 吟替り　悲哀の聲

— 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

〜 地の音

∨ 聲を上る

∧ 聲を下る

〜 聲の終を長く引き下る

〜 聲の終を長く引き上る

〜 聲の終を引き震はせ下る

〜 聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

地

児島高徳

元弘二年、如月の小雨そぼふる笠置山、向ふも恐れぬ夜の風に、さて行手は捕の網だに見へぬ常闇に、蓋さぞ迷ふる人面の、心は鬼か蛇の姿、妖怪変化の賊共は、恐るゝも天皇の、龍駕西の海浪路遥かに

明治 41 39 内交

移りたり、其有様は今も尚、史上に見るだ
にその毛ぶり、瞞きくもすさに絶るばか
りなむ国に、古うもむ外おぼすし、
其時児島高徳は、衆を集へて言
へる様、汝が仁なるを為めに、おのれ忠らし、
義なんて成すは富なると、励ます言葉

二

励む武士、共々むかふ舟坂の、山の険阻は
大きやかなり、天の嶮へ要害と、水を潜
へる堅垂を、我天皇を奪奉らんと待に
甲斐なき鳳輦は、早や山陰に向ひめぐり
くるる早く杉坂の樹の根岩角踏砕き、乃
おぼんば又も鳳輦は、遥かに過ぎて後影へ

三

煙草に拜むばのすがり、」今ぞ拙き

海はるか、跡見送りて高德は、天に眺

んで地に哭し、海ぬれて身ぬれ

し、雨の辰も過ぎ、厭はずぼの跡

慕ひしに、善き所あれば赤ばらぬ、

枕元に坐えぎ、寂寞なる奉ると、

氣の張る弓は撓まめ、守り嚴しき

拔びし、隙なく俄に面後に、差足

拔あ日本、まくの老木かき削

て、星斗の星のくと、赤き心を書き

おろす、

天莫レ空ニ勾踐、時ニ非レ無ニ范蠡、

十字の文字は長城の、堅き固めを、
勤王の、志すも賊は明めらん、辯り見
も明かす、阿房阿房と笑ふのみ、我
天皇は龍顔最も宸襟の
間、愁の御眉を解き給ふ有がの如、
斯るに高徳が、虎の穴ぶし恐を
なす虎の子得んと思ひし、勲は後
の世々まで、輝き渡て雲なき、明治
の御代に愛国心、古き武士魂新し
く、護する神ぶり崇らん、きれど代
の人心世、彼人なり吾も人、食ふ
は今も古も、日本に實る瑞穂なり、

飯は昔も今日も、「生き日本の國の人、鄙の隅迄い出て、國故に忠に誠の「樂」夢や結ぶ。

八

257
456

薩摩琵琶歌書

錦の御旗本能寺
臺灣入辨内侍
川中島白虎隊
元寇太田道灌
石童丸國の御柱
城山王照君
那須與市兒島高德
常陸丸廣瀨中佐
小督（以下續刊）
威海衛各一冊
櫻狩定價金六錢
毒饅頭郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

明治四十一年六月三日印刷
明治四十一年六月二十日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店（振替口座一六七五）

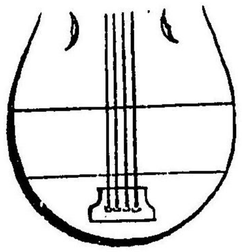
特約販賣所　東京市神田區美土代町三丁目一番地　富田文陽堂

賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり

薩摩琵琶歌

小督

257
377



曲譜

大かん　大聲に吟ずべし

中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

きり　大聲にて歌ひ廻す

吟替り　悲哀の聲

崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

地の音

聲を上る

聲を下る

聲の終を長く引き下る

聲の終を長く引き上る

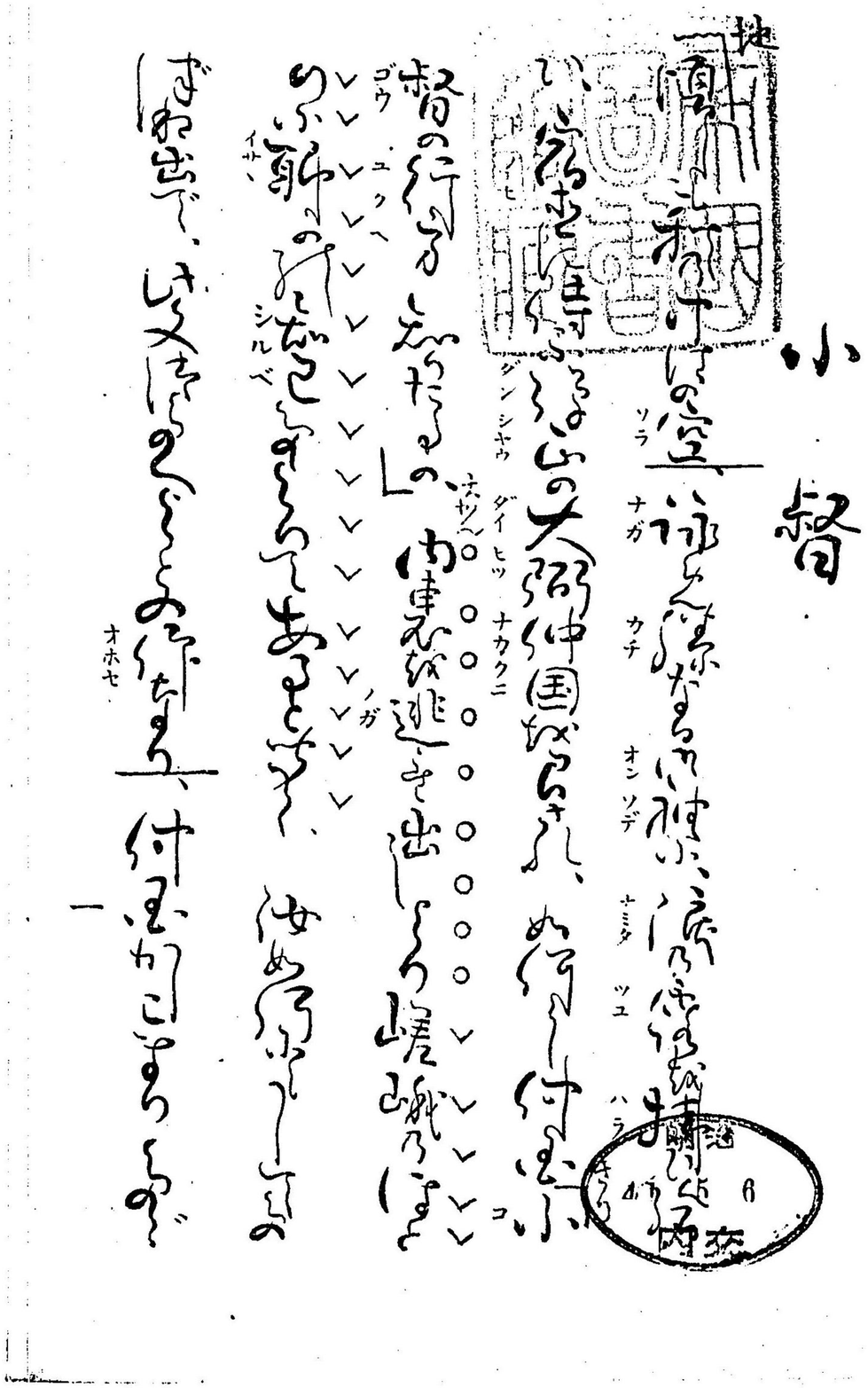
聲の終を引き震はせ下る

聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし、以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

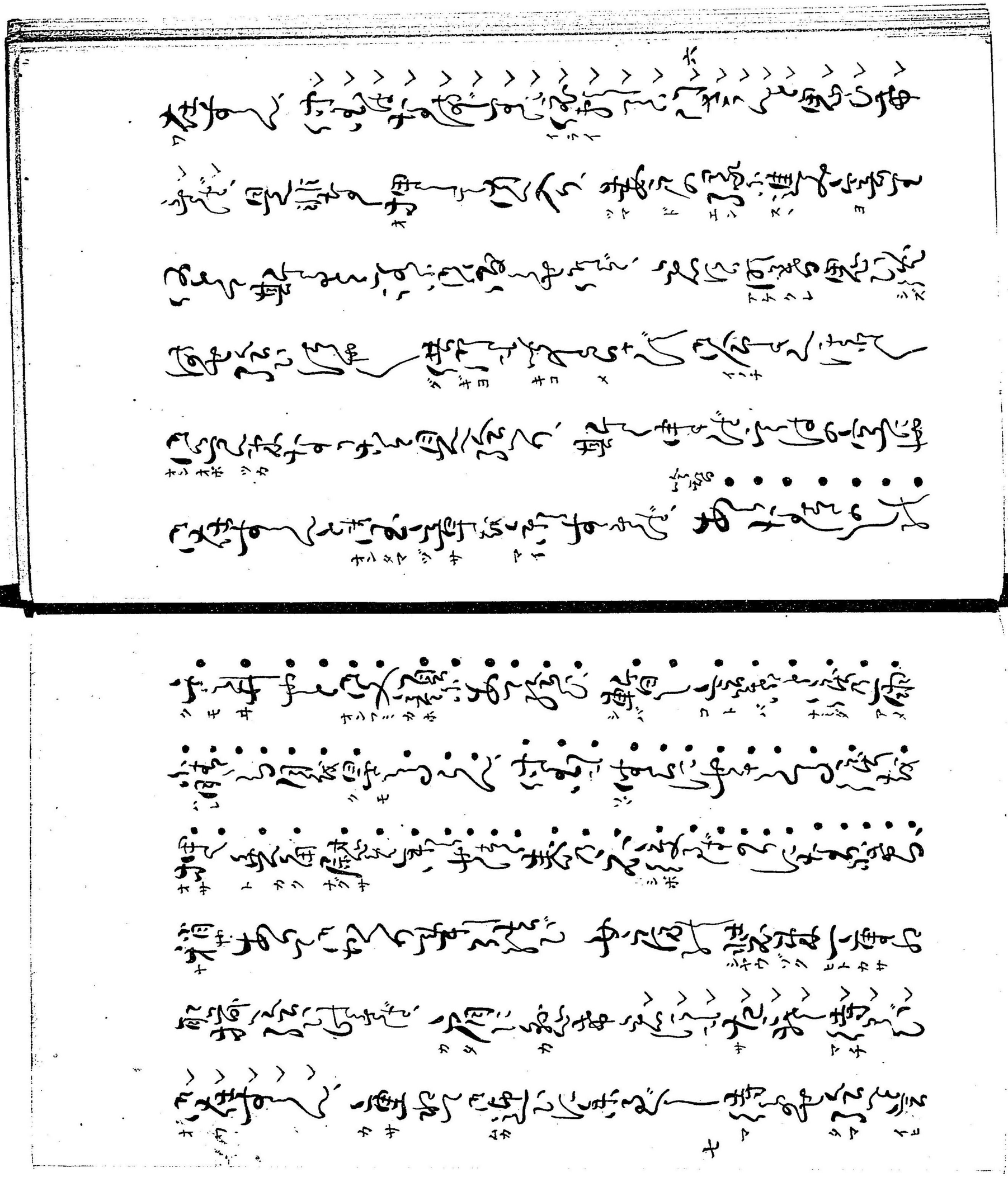


嵯峨のほとりに住まひ侘びたる人の尋ねきたりて、わが庵はなほそこもとの縁の殿なりとて、よもぎふ生ひしげる宵の月に、その人と思ひ出で、酒べ給はんまうしもあらじ、空ふく風にも消えぬべき命をいとはしく、憂き世を厭ひ捨てし法師の、世にあるかひなきを思ひ定めたる賢の、寂の庵ふ

まうて、隈なき月ふ難を拾ひ、おのがすむ山里と示し、東に嵯峨野の奥に分け入る人まれ、ふる道ふ落ち葉ふ埋もれて、鳥かとしたる色の苔に埋もれ、人の跡ふ絶えたる中に、ただ一人ふ向ひて、物ふ思ふ顔にて、独ふ琴を弾じ、詩を口ずさみ、ふと琴を置きて、向ひ合ふ人に、「いかに、いかに」、問ひ給はんと、駒を立てて、只庭ふ立ちて居たるが、元の宿坊

ふね在すん、と堀山近く到りしに、出船がき遠に見えわ、
嶺れ
峰の山風のうなりめるこえの琴の音や、とめて行者ば
ね
樹々の枝をふるはせ、寺に入るまで高く手綱
オト
ゆるめたくと、波ぢ遠の月をあり、遠のむこう
ツキ　ハナ
に寄りて笛ぢのうすきし時、聴きなれぬ調べ、
シラベ
弾く曲はあまそ、さては絃をあじとて腰
コト　サラ　キヨク　ソウ　フ　レン　マギ　コシ

ら用ゐめ出ぬ、ふたらき導て頃て駒ら花
ヨウ　テキ　フナ　ヤガ
参りて門ぢ叩く、ゆき、出きは付ぬ、内裏ちの
タ　オ
後に参らう、用事ぢ強くと言いに蝶ぢ絃さ
ア　オトナ　コト　ヒ
差ぢ、かくぢて言ちまた、やあるいの市
ア
ちの小ぬ屋、頭ぢの楽差出しあやしの駒の伝ふ
シヅ　フセヤ
内裏ちの後ちまで行ぢあず、行遠に
ダイリ　ホ



いきて、「駒なほ早くとうたかう」あしたの義務

なす善をするうたびに、ほのぐらと明かき後なるべし明者

にまう、「和平おほふまう」。

257
377

薩摩琵琶歌書

錦の御旗
臺灣入
川中島
元寇
石童丸
城山
那須與市
常陸丸
小督
威海衛
（以下續刊）
各一冊
定價金六錢
郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

薩摩琵琶歌會藏版章

明治四十一年四月廿日印刷
明治四十一年五月二日發行

著者　薩摩琵琶歌會

東京市神田區橋本町二丁目五番地
發行兼印刷者　朝野文三郎

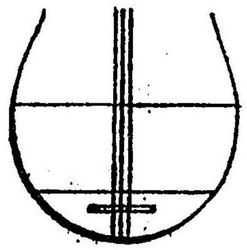
東京市神田區橋本町二丁目五番地
發行所　朝野書店
振替口座一六七五

賣捌所は全國到る處の書店雜誌繪双紙店にあり

薩摩琵琶歌

金剛石千代の松

257
737



曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

「 きり　大聲にて歌ひ廻す

● 吟替り　悲哀の聲

ー 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

ヘ 地の音

∨ 聲を上る

∧ 聲を下る

ヘ 聲の終を長く引き下る

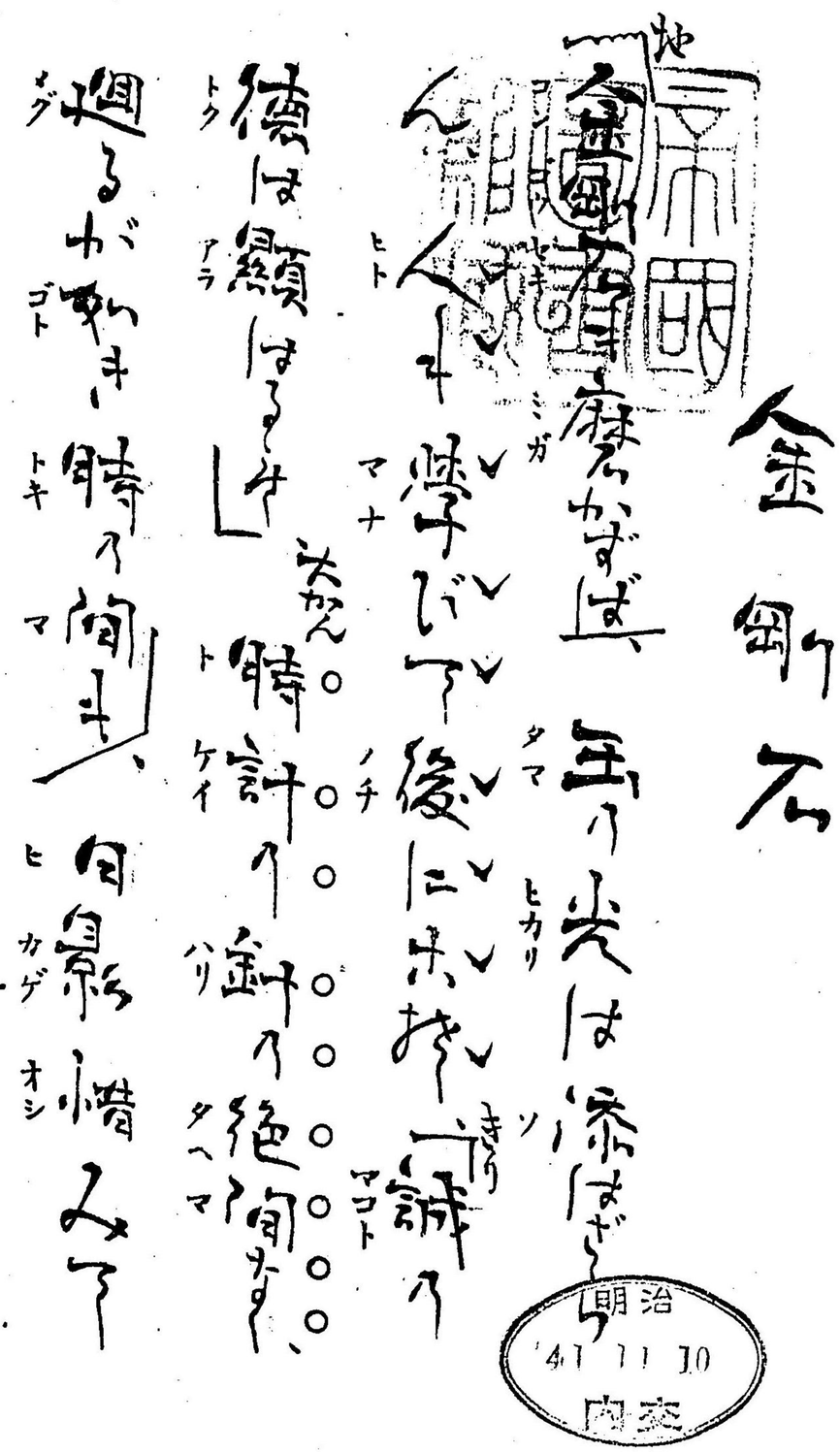
ノ 聲の終を長く引き上る

ノ 聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會



厳(ハゲ)みなれば、如何なる業(ワザ)かなすらむ、

水(ミヅ)は器(ウツハ)に従(シタガ)ひて其(ソ)の形に

なり、人(ヒト)は交(マジハ)る友(トモ)によりて善(ヨキ)

に悪(アシ)きに移(ウツ)るなり、

友(トモ)を擇(エラ)び求(モト)むる者は、必(マサ)に優れる者

を諸(モロ)トモ

駒(コマ)に鞭(ウチ)を加へて、學(マナビ)の道(ミチ)に進(スス)む

べし。

千代の春

施

かゝる目出度き御代なれば　国々所々

に至るまで、千代の春千歳の

楽しみを、貴賤小男の恵み深き故ぞ

　　秋なき

　　きり

　　アキ

　　クニぐ　ショく

　　メデタ　ヨ

　　イタ　チヨ　ハル　チトセ

　　ミナ　キミ　メグ　フカ　ユヘ

　　キミ　アワ　タテマツ

五

思いくの殿たち、瓔珞を垂れ軒
を連られ、高殿樓閣に構へたり、銘
日の光月の影、宇宙を尖の輝くも、
赤子も知らぬ鬼はけて、庭には金
銀の砂石をぶりまき、四方の圍みも果多
し、不老門を出入る人の、福を連
られて迎めは、是ぞ名に負ふ華台
城の、「都の春もかゝやあらん、
かほど、栄ふ代なれば、雨風までも
枝高きと云へば又、人も、て、君

257
737

薩摩琵琶歌書

錦の御旗太田道灌
臺灣入國の御柱
川中島王昭君
元寇兒島高德
石童丸廣瀨中佐
城山吉野落（上下二）
那須與市小敦盛（上下二）
常陸丸赤穗義士（上下二）
小督吹雪の敵
威海衛能本籠城
櫻井我兄弟
毒饅頭（松嶋 別合本一）

（曲譜轉載を許さず）

本能寺（以下續刊）
辨内侍定價金六錢
白虎隊郵稅金二錢

◎◎賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり◎◎

明治四十一年十一月一日印刷
明治四十一年十一月五日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店（振替口座一六七五）

特約販賣所　東京市神田區英上代町三丁目一番地　富田文陽堂

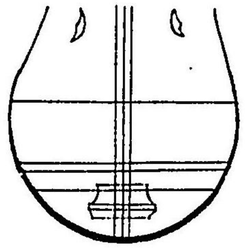
薩摩琵琶歌會藏版章

ハルヤマガ　ヤマヒ　ヤ　ヤ　ヤ

薩摩琵琶歌

櫻狩

257
456



曲譜

○ 大かん　大聲に吟ずべし

∩ 中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

⊔ き　り　大聲にて歌ひ廻す

◦ 吟替り　悲哀の聲

— 崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

ノ 地の音

ノ 聲を上る

ノ 聲を下る

ノ 聲の終を長く引き下る

ノ 聲の終を長く引き上る

ノ 聲の終を引き震はせ下る

ノ 聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

地

櫻狩

かすみ棚引く春の日を、いそぐ駒に鞭おかせ、

東雲もかくや麻苧生ふ、大かん○○○

妙なる春の野に、えゆる草葉は露をふくみて、すまる駒のたてがみに、
みどりかさる青柳は、糸を傳ふ朝風に、吹くすゝにゆかし香
を、おくりてふるきまゝふかと、思
ふばかりに遠近の、猶は雪か白雲か、
景色妙なる其きはに、こゝ世の
善惡も打すゝ、志ばし太宰
に立ちて、点ちそれ筆をかり
あへず、

薄命能伸旬日ノ毒、納言姓字骨ニ斯花ヲ、
ハクメイ ヨク ノバス ジュンジツ ジュ ナゴン セイジ ヨカ コ ハナ

零丁借宿平忠度、吟詠恨風源義家、
レイテイ カル ヤド タイラタダノリ ギンエイ ウラ カゼ ミナモト ヨシイヘ

志賀浦ノ菜翻リ暖雪、奈良都古蔭ニ香霞、
シガ ウラ アレ ヒルガヘ ダン セツ ナラ ミヤコ フ アツマ コウ カ

南朝ノ天子今何ニ在マス、欲セバ望ント芳山ノ路実ニ賒ナリ、
ナン チヤウ テン シ イマ イヅク マシ ホツ ノゾマ ホウ ザン ミチ サラ ハルカ

とかき はぎ ぬき ぬき 水豈ぬ、あれり
ミヅ クキ

殘ノコ花カ香カ、風カゼ ぬれば ぬ
ぬ ぬ ぬ ば、盛サカリ ぬ ば ぬ ぬ ぬ、
ぬ ぬ ぬ 花は野に畑タに、飛トブ蝶のテフ
如ぬ ぬ ぬ 吟替り嗚呼ア世ヨの中ナカはぬ ば ぬ ぬ タマ、
夢ユメか ぬ ぬ ぬ

よゝけふは年、見る影もなく成
て果て、うき世の中とおもはゝ、
今宵おもきとゆふぐれの、鐘の音
きへ身にしみて、昔なじみの人も
あらむ、たゞは去ながら死ぬるも、

又来む春にめぐりあい、まぢ
き人もいつまでか、時々なれ
らんや、榮枯盛衰は世の習
ひ、只玉鉾の道理なれば「すぐらも
ゆはなりけり」、いざ帰らもと

257
456

薩摩琵琶歌書

錦の御旗本能寺
臺灣入辨内侍
川中島白虎隊
元寇太田道灌
石童丸國の御柱
城山王照君
那須與市兒島高德
常陸丸廣瀬中佐
小督（以下續刊）
威海衛各一冊
櫻狩定價金六錢
毒饅頭郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

明治四十一年六月三日印刷
明治四十一年六月二十日發行

著者　薩摩琵琶歌會

發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店（振替口座一六七五）

特約販賣所　東京市神田區美土代町三丁目一番地　富田文陽堂

賣捌所は全國到る處の書店雜誌店にあり

来る駒の、手綱（ヅナ）かいくる其袖に、花の（ソノ）
ゆゑ、まはかをけて、をち（まち）の岡
ぐまはかをけり」。

薩摩琵琶歌

城山

257
377

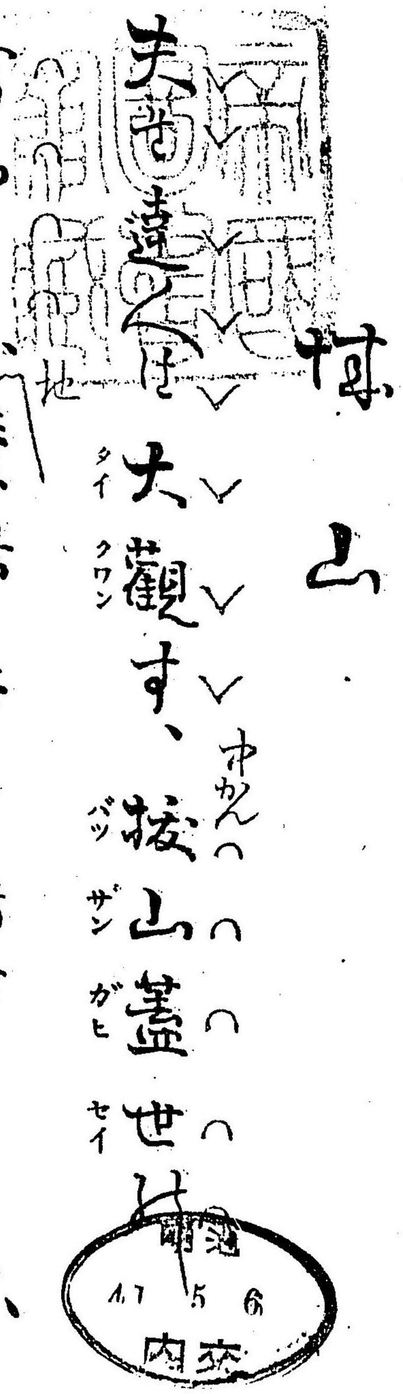
曲譜

大かん　大聲に吟ずべし
中かん　結末の句にのみ節を用ゆ
きり　大聲にて歌ひ廻す
吟替り　悲哀の聲
崩れ　緩急の度を失ふ勿れ
地の音
聲を上る
聲を下る
聲の終を長く引き下る
聲の終を長く引き上る
聲の終を引き震はせ下る
聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會



明治
47 5 6
内交

中隊の、織田軍激戰する數千騎、雲
霞に雲も進む雄の、騎虎の勢ひ一
瀉千里の勢ひ、留らがらず、是非もなき、唯身
一を投打捨て、若殿原に報いなむ、
明治十年の秋の末、法華軍は打破れ、
討ち捨て討ち捨てやがて散る、霜の紅葉
血の血潮に染まるとも、顧みぬ、薩摩
武夫の雄武ひと打散る玉は拔ぬき、
あれ見しら、ぬくにて、先も向かん
方ぶもなき、木綿ふいぐ、鬱ひ、

百の雷一時に落ちるが如き有様なり、隆盛打見て笑ひ、あなる事は
しれくらや、亥の年以来養ひ来りし
腕の力もつめし見て心ふ強る事はなし、
いざ諸共ふ塵世を脱ぎ出でんは此時と

唯一言を名誉にして、桐野村田抜かれし
宗旨の輩一つを火燃へ滑へ大丈夫
心の中は如何ゆ吟哉、官軍出来は健
みて、昨日まで陸軍大将と仰がれて
実に意義遇世に類ひなかりし英雄も

今は藤袴と云へば
はて哀る世の無情に感じ
思ひ胸に満ち唯悄然と隙位
見合すばかりなり、扨も吹き
ゴす時山水の多あり岩角に結ぶ

谷水の無常は色は何となく悲傷
するかと云ふ扨鏡の袖に
うつむき

257
377

薩摩琵琶歌書

錦の御旗
臺灣入
川中島
元寇
石童丸
城山
那須與市
常陸丸
小督
威海衛
（以下續刊）

各一冊
定價金六錢
郵税金二錢

（曲譜轉載を許さず）

薩摩琵琶歌會藏版章

明治四十一年四月廿日印刷
明治四十一年五月二日發行

著者　薩摩琵琶歌會

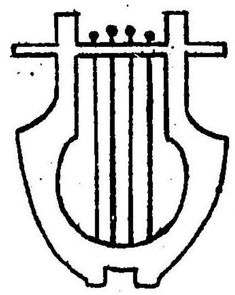
發行兼印刷者　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野文三郎

發行所　東京市神田區橋本町二丁目五番地　朝野書店
振替口座一六七五

賣捌所は全國到る處の書店雜誌繪双紙店にあり

薩摩琵琶歌

雷神丸



257
945

曲譜

○大かん　大聲に吟ずべし

（中かん　結末の句にのみ節を用ゆ

「きり　大聲にて歌ひ廻す

●吟替り　悲哀の聲

一崩れ　緩急の度を失ふ勿れ

〜地の音

〜聲を上る

、聲を下る

〜聲の終を長く引き下る

／聲の終を長く引き上る

〜聲の終を引き震はせ下る

／聲の終を引き震はせ上る

注意

薩摩琵琶歌獨奏の便に供せんとし其曲譜の大要を如上符號を以て明示せり、此歌は他の歌曲と異なり大體の定節即ち「大かん」「中かん」「きり」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、其他に至つては各自曲節を異にする個所なきにあらず、畢竟琵琶歌は山形に歌ふべく、其妙趣は本書を懷にし以て先輩の獨奏を耳にし攻究せば自から獨奏容易なるべきなり。

薩摩琵琶歌會

母はきゝ、内方、ほど歎きに沈みぬ。
なき小供の心にも、限みは五體に染み渡り、
生長したらんかの秋は、健言なれば討ちの人と共に月
日、春夏秋冬一日に、来らんかと語り合ふ、
二人が言の葉陶々母は、来たれば
おもひまる、時々九月十三夜、月ば

隔たりき庭の面、那むる折柄みそらの、
なれば好きは数へば、矢上五月の雨の内、
二人はかなが父母か、翁だに父母あるまけれ
嘆きを実に、道理なし、ぼれ
矢陰矢の如く、一月ぬ髪を上ぎ、
春秋十郎、右成上、名を改めてぼ